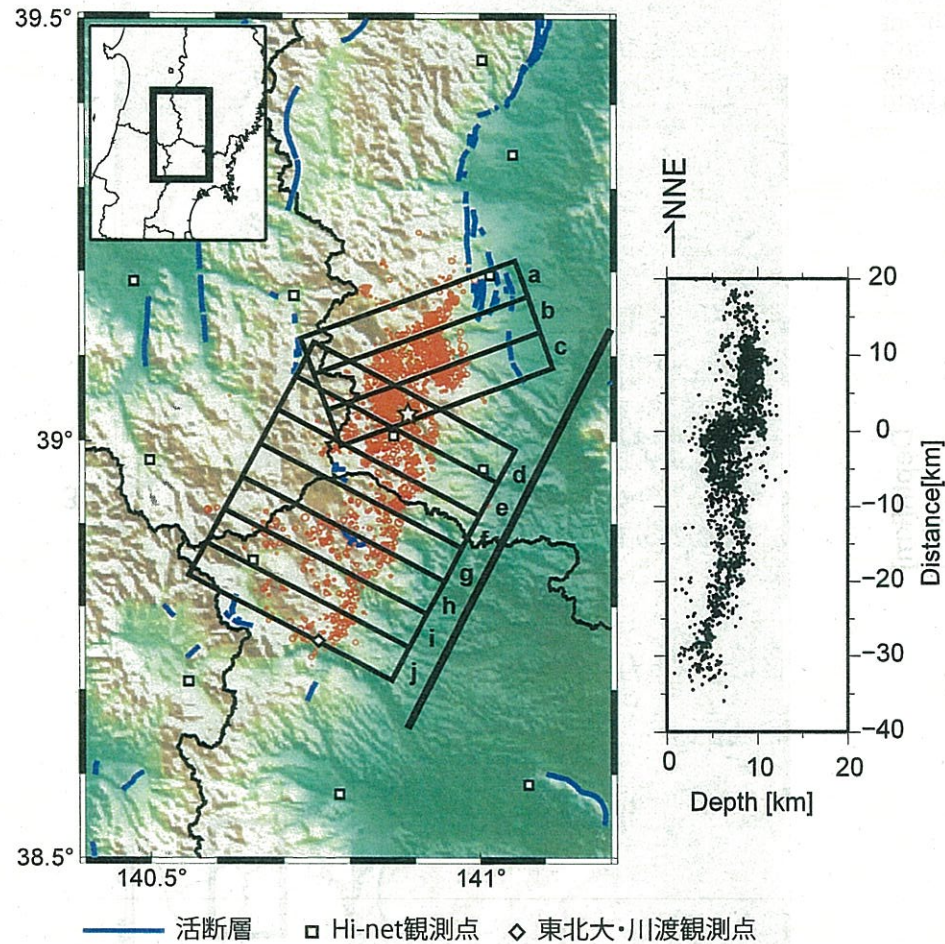


Double-Difference法によって求められた震源分布



2008年6月14日午前8時～25日に発生した地震を対象に、Double-Difference法 [Waldhauser and Ellsworth, 2000] により再決定した震源分布。☆印は本震の位置を表す。上図に示した黒太線へ投影した断面図を中央に、各領域における断面図を右に示す。右側断面図中の赤丸はM4.5以上のイベントを表す。

震源域北部のa領域では、西南西傾斜の活動が2面存在し、東側の活動が活断層地表トレースに繋がるように見える。この活動は、地震発生層のほぼ下限(D90%)周辺で活発である。本震は、c領域の-6 km, d領域の0 km付近に存在する。d領域では、約45度で西に傾斜する地震活動に本震が含まれる。この余震分布は、本震のMT解の節面と整合的である。また、その浅部延長には、産総研により報告された地表地震断層が存在する。岩手県側に比べ、宮城県側(領域f~j)の余震活動は低調である。余震域東端(距離5km付近)の地震発生層下限付近でクラスターの発生しているが、この地域には定常観測点が存在しないため、適切な深さを推定出来ていない可能性がある。

本解析において、東北大学・川渡観測点の波形データを使用いたしました。記して感謝いたします。

